

区民と創る港区の男女平等参画のための情報誌



VOL.
88

令和8年(2026年)
1月発行



特集：少女たちにとっての戦争 ——記憶を未来へつなぐ——

インタビュー：小林エリカさん(作家・アーティスト)

「風船爆弾」をつくった女の子たち～“彼女たち”の声なき声に耳を澄ます～

インタビュー：松本春野さん(絵本作家・画家)

トットちゃんがつなぐ平和へのバトン

リーブラ図書資料室からのお知らせ



「風船爆弾」をつくった女の子たち ——“彼女たち”の声なき声に耳を澄ます——

【インタビュー】 小林 エリカさん

戦時中、東京宝塚劇場で兵器を作っていた女学生がいたことをご存じですか？ 当時の日本では、アメリカ本土を攻撃するために「風船爆弾」という兵器が開発され、その製造に女学生たちが動員されました。彼女たちの戦争体験を描いた小説『女の子たち風船爆弾をつくる』（文藝春秋、2024年）は、第78回毎日出版文化賞を受賞しました。今回は、著者である小林エリカさんに、戦時下を生きた少女たちの声を拾い上げ、歴史の陰に光を当てた思いを伺いました。

「風船爆弾」をつくった女の子たちの物語を書いたきっかけ

——『女の子たち風船爆弾をつくる』では、戦時中に「風船爆弾」の製造に動員された少女たちの日常や心情が、例えば月経などのリアルな身体感覚とともに丁寧に描かれています。これらの描写は長期間に及ぶ膨大な裏づけ調査に基づくということですが、まず、この本をご執筆されたきっかけについてお聞かせください。

東京で生まれ育った私は、高校時代、作中に登場する学校の制服を着た女の子たちとすれ違うこともありました。そんな折、母から私の学校の保護者会で、戦時中に学徒動員され風船爆弾を作っていた方が話をされた、と聞いたのが最初です。ただ、そのときは記憶には残ったものの、深く考えることはありませんでした。

その後、作家となり、アメリカの原爆開発について調べていた際、風船爆弾が引き起こした停電で原爆製造が遅れた、という記述に出会いました。その瞬間、自分の記憶と歴史が初めてつながった感覚がありました。そこから、風船爆弾についてもっと知りたいと思い、資料を探し始めたのです。

当時、風船爆弾の製造は日本全国で行われていま



小林エリカ著『女の子たち風船爆弾をつくる』（文藝春秋、2024年）

したが、東京宝塚劇場に限った資料は、たった1冊しか見つかりませんでした。それは、かつて動員された女学生の南村玲衣さんが戦後に自らまとめたものでした（『風船爆弾——青春のひとこま 女子動員学徒が調べた記録』私家版、2000年）。その本に出会ったことが、この作品を書く最終的なきっかけとなりました。

10年かけて集めた“女の子たち”の声と記録

——具体的にはどのように取材を進められたのでしょうか？

まず、動員されていた女学生たちが通っていた学

校に相談し、お話を伺える当事者の方がいないか探したり、資料を提供いただいたりしました。各学校の尽力により、内部でのみ保管されていた貴重な記録も読むことができました。

保護者会で私の母に話をしてくださった方には残念ながらお会いできませんでしたが、唯一の資料の著者である南村さんが取材に応じてくださいました。さらに、取材の過程で出会ったご家族やご友人の方々から伺ったお話も作品に反映しています。

また、風船爆弾の製造や、戦後に軍がこの作戦を隠蔽したことについては、明治大学平和教育登戸研究所資料館の方に教えていただきました。

驚いたのは、この本の出版後も、当時を知る方やそのご家族から時折連絡をいただくことです。そうしたお話を伺うたびに、「まだ終わっていないのだ」という思いを強くします。

“女の子たち”の歴史を描くということ

——作中では有名な歴史上の人物の名前はほとんど登場せず、むしろ一人ひとりの女学生たちが名前をもった存在として丁寧に描かれていますね。

書き始めた当初、登場人物の名前がすべて男性で埋め尽くされていることに気がきました。学校で学ぶ歴史も、第二次世界大戦といえば「ヒトラーが何年に政権を取った」というように、男性の名前を通じて語られるものばかりです。自分自身も、そうした語り方しか知らなかったのだと、改めて思いました。

では、なぜそうなのか。そこに確かにいたはずの女性たちの名前だけで、自分にわかる範囲で語り直す歴史があってもいいのではないかと——そんな思いから、今回は「女性の名前しか出てこない」本になりました。

歴史小説や戦争を描いた作品は数多くありますが、ここまで女性の名前だけで構成されたものは、なかったのではないのでしょうか。そう考えると、われながら誇らしく思っています。

——東京の地名や建物の名前などを含め、具体的なものの名前が多く登場する点も印象的でした。

いわゆる「歴史書」を書くとき、「学校の制服に^{いかり}錨のマークがあったかどうか」まで記されることは、多くはありません。

戦争が語られるとき、どうしても「ハイライト」ばかりになりますよね。空襲で大変だったとか、食べ物が芋しかなかったとか、そういう話は聞いたことがあるし、想像しやすい。でも、その一方で、今とそう変わらない日常も続いていたのだと気づきました。

月経についても、食べ物がなかったから止まっていたのだろうと思っていました。ところが、むらき数子さんが記録した証言に「空襲で死ぬなら、月経じゃないときがいい」と書かれていたのを読んだとき、ハッとしました。戦争中も月経のことを気にしなければならぬし、トイレにも行かなければならない。そんな日常が続いていた中での「戦争」だったと知ったとき、心底恐ろしいと思いました。だからこそ、それをきちんと書きたいと思ったのです。

また、「口紅を塗っていないと、死体さえ丁寧に扱ってもらえない」という話を知ったときも、かなりショックでした。防空壕に入るときに「男性がいなかろうか、よく気をつけて」と言われていたことも印象的でした。

「わたし」と「わたしたち」

——2つの主語に込めた思い

——この作品は「わたし」と「わたしたち」を同時に用いた文体が特徴的ですが、どのようにしてこの文体にたどり着かれたのでしょうか？

これまで史実をモチーフにした作品を書き続ける中で、事実とフィクションのバランスをどう取るか、ずっと悩んでいました。そんなときに出会ったのが、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『チェルノブイリの祈り』（松本妙子訳、岩波書店、2011年）、日系アメリカ人作家ジュリー・オオツカの

『屋根裏の仏さま』（岩本正恵・小竹由美子訳、新潮社、2016年）、そして韓国の作家キム・スムの『ひとり』（岡裕美訳、三一書房、2018年）です。これらの本はいずれも、実際にあったことを歪めず、そこにフィクションを重ねる手法で書かれていて、目が開かれる思いがしました。

ただ、その方法をそのまま自分に当てはめることはできないとも感じていました。登場する女の子たちは実在する人物です。そのため、「わたし」という主語で書くことに強い抵抗がありました。完全なフィクションなら「わたし」と語ることもできますが、実在する女の子に対してはどうしてもできなかったのです。

そんなとき、「わたしたち」という主語があることに気づきました。この国に生まれ、日本国籍を持ち、その国が過去に行ったことや歴史に対して責任を負う「わたしたち」の1人としてなら、書けるかもしれない——そう思えたとき、「わたし」と「わたしたち」という2つの主語を使う文体にたどり着きました。

さらに書き進める中で、自分自身がこれまで「日本で空襲があった」「原爆が落とされた」というように、受け身で主語のあいまいな表現に慣れていたことにも気づきました。だから今回の小説では、すべてにおいて「誰が、どんな意図で、どうしたのか」をきちんと書こうと思ったのです。空襲は自然災害ではなく、誰かが行ったもの、だからです。

——また本作で、女の子が犠牲者としてだけではなく描き方をされていたのも印象的でした。

「戦争もの」というと、女の子は無力でかわいそうな犠牲者としてしか描かれているものばかりを、子どもの頃の私は観ていました。でも女の子であることは、本当に「何もできない、ただかわいそうな存在」なのか。たとえ社会的に無力な立場だったとしても、きっとそれだけではない。当時の女の子たちにも、加担させられた部分があったとしても、同

時に自分たち自身の意思は確かにあったはずです。女の子たちは決して「かわいそう」なだけじゃない——。そこを認めたうえで、どう考えていくかが重要だと思いました。

未来を変える小さな力 ——今の社会に必要なこと

——この作品には、現在の私たちにも跳ね返ってくる問題が多く描かれていると感じました。今の日本社会に必要なことは何だとお考えになりますか？

最近「楽しいことが必要だ」と強く思うようになりました。平和の大切さを真面目に語ることももちろん重要で、私自身も真剣に取り組んできました。でも、それだけでは前に進めない気がしています。

たしかに世界情勢は不安定で、ネガティブなニュースが目につきやすいですが、この何十年を振り返ると女性として生きやすくなったこともあると思うんです。例えば、私がこうして本を書き上げたり、子どもがいても仕事を続けられたり、昼間に1人になれる時間があるということ自体、祖母の世代からすれば本当に奇跡のようなこと。それは、これまで多くの人が尽力してくれたからこそ実現した変化です。

こうした「良いこと」は、「悪いこと」に比べて目につきにくい。だからこそ一つひとつを^{たた}称えて「すごいぞ」と思うことが、次の10年、20年を変えていく力になるはずです。私自身、この社会はまだまだ変われると、楽観的に思っています。

——これからの時代を生きていく女の子たちに、どのような社会を残していけたらいいのか、小林さんご自身の考えをぜひお聞かせください。

子どもの頃の私は、戦争を止められない大人たちは何をしているんだろうという無力感と、ちょっとした絶望感を抱いていました。でも、今自分が大人になってみて、それでも「変えたい」「頑張る

たい」と思っている大人もいるんだということがわかったし、それは伝えたい。そして、できる限りのことをしていこうと思っています。

一人ひとりの力は小さいかもしれないけれど、決して無力ではない。そのことを、子どもたちには忘れないでいてほしい。歴史や社会のことは、つい「偉い人」や「専門家」に任せがちですが、そうではなく、一人ひとりが作っていくものだと思います。大人も子どもも関係なく、「自分は何をしたいか」という思いが世界を動かしていく。私はそう信じています。

「なかったこと」にしないために ——記憶をつなぐ営み

——小林さんは、記録に残らなかった人々や語られなかった出来事に光を当ててきました。そうした「なかったことにされてきたもの」を、私たちはどうすれば「なかったこと」にせずになれるのでしょうか。小林さんが続けてこられた活動の中で、私たちにできること、心がけるべきことについてアドバイスをお願いします。

子どもの頃、「今自分が死んだら、何もなかったことになってしまうんじゃないか」と思って、すごく怖かったんです。でも振り返れば、そんなことはありません。どんなに小さな子どもでも、歴史的な偉業を成し遂げていなくても、周りの人にとってはかけがえのない存在であり、その記憶は確かに残ります。今回、この本を書くことができたのは、家族の思い出や友達との記憶、学校での出来事などを綴った資料があったからです。今の私は、その声を文章にできるから、書き残したいと思っています。たとえ自分が書けなくても、未来の誰かが書き留めてくれるかもしれない——そう思えることが、私にとって大きな希望です。

記録された言葉だけでなく、覚えていたこと、語ってくれたことも含めて、その存在が、私たちが

いなくなった後にも届いていく——それは本当にすごいことだと思います。書いた人たちは作家でもなければ、特別な報酬を得ていたわけでもない。ただ「大事だ」と思ったから書き、「忘れたくない」と思ったから覚えていた。ただそれだけのこと。でも、その「ただそれだけのこと」が、本当に大切なのだと私は思います。

それは今日からでも、明日からでも、一人ひとりが始められることです。こうして一緒に書いていただけることで、この思いが届き、それぞれの「大事なこと」を覚えたり、書いたりすることが始まったらしいなと、心から願っています。

話者プロフィール

こばやし
小林 エリカさん

作家、アーティスト

著書に小説『最後の挨拶 His Last Bow』（講談社）、『親愛なるキティーたちへ』、コミックに『光の子ども1,2,3』（ともにリトルモア）他多数。絵本『わたしは知らないおんなのこ』（岩崎書店）、翻訳を手がけた絵本インドのタラブックス『わたしは なれる』サンギータ・ヨギ著 (green seed books) などもある。



トットちゃんがつなぐ平和へのバトン

【インタビュー】松本 春野さん

戦後 80 年を迎え、戦争を経験した世代が少なくなる中、戦争の悲惨さや平和の尊さを次世代にどう継承していくかが大きな課題となっています。そうした中、黒柳徹子さん（俳優・ユニセフ親善大使）が少女時代に直面した戦争体験を描いた絵本『トットちゃんの 15 つぶのだいず』が注目を集めています。本特集では、同作品の挿絵を手がけた絵本作家の松本春野さんにインタビューを行い、絵本を通じて次世代に平和を語り継ぐことについてお話を伺いました。

いま、「トットちゃん」を描くことの覚悟

――『トットちゃんの15つぶのだいず』は、黒柳さんがご自身のコンサートで語られたお話が原案になったと伺いました。また、黒柳さんの名著『窓ぎわのトットちゃん』の挿絵を描かれた、絵本作家・いわさきちひろさん（1918-1974）は、松本さんのお祖母様でいらっしゃいます。率直に、絵本のご依頼が来た時のお気持ちをお聞かせいただけますか？

黒柳さんは長い間、いわさきちひろ以外のトットちゃんの絵を認めていませんでした。『窓ぎわのトットちゃん』は世界中で出版されていますが、挿絵は全てちひろの絵です。それだけ、黒柳さんはちひろの絵に強い思い入れを持っています。私は幼い頃から、ちひろに対する黒柳さんの思いを知っていましたし、だからこそ、絵本のご依頼をいただいた時は本当に驚きました。

『窓ぎわのトットちゃん』は、今でも世界中で読まれています。日本でもトットちゃんを知っている世代は年々高齢化しています。

私が『トットちゃんと15つぶのだいず』を描いた年は、新たな絵柄で『窓ぎわのトットちゃん』（八锹新之介監督、2023年公開）がアニメ映画化された年でもありました。令和になっても世界では紛争が止まず、「新しい戦前」という言葉まで出ていたタイミング。そんなときだったからこそ、若い世代にトットちゃんを通して改めて平和を伝えたいと、黒柳さんの中で大きな心境の変化があったのか

もしれません。

いわさきちひろが描くトットちゃんと、私が描くトットちゃん

――トットちゃんの絵本を描くにあたって、祖母いわさきちひろさんの存在について、お伺いしてもよろしいでしょうか？

多くの方にとって、「トットちゃん」はちひろと黒柳さんの共同作品だと思っているでしょう。でも実際あの作品は、ちひろの死後に作られました。黒柳さんが、文章に合わせ、ちひろの遺作から一枚一枚、私の両親とともに選んだそうです。

ちひろが描いたトットちゃんの絵で、みなさんに一番知られているものは、『窓ぎわのトットちゃん』の表紙の絵ではないでしょうか。お帽子をかぶって、両膝を揃えて、キチンと座っている、あの絵です。あのトットちゃんがあんなにお行儀よく座っているんですから、きっとトモエ学園にはじめて向かう日なのでしょう。ちひろの絵の女の子は、みんなどこか「行儀がいい」。それは、明治生まれの女学校の教師である母親に、当時の「女子教育」で育てられたことも背景にあるのだと思います。当時の女子教育は、「女性という枠を飛び越えない／させない」ものでした。でもトットちゃんはそんな教育の枠をとび越えちゃう、規格外な存在です。

ちひろの育った時代と異なり、男女の垣根を取り払う意識が芽生え始めた時代に育った私は、行儀の悪い女の子はお手のもの。この年代の絵描きだからこそ、トモエ学園にすっかり慣れ、通学電車の座席

で、足なんか開いてリラックスして座るトットちゃんを、いきいきと描けるかもしれない。今の子どもたちの友達になれるようなトットちゃんを新たに描くことには意味があるし、楽しみたい。そんなふうに思いながら、心を込めてトットちゃんを描きました。

何気ない日常から、平和を想像してほしい

——トットちゃんの絵本を描くうえで気をつけたことなどはありますか？

この絵本をきっかけに、学校の平和教育に呼ばれることがあるのですが、私はまず生徒さんに『トットちゃんの15つぶのだいず』の最初のページ、明るいリビングでトットちゃんと両親、弟と飼犬のロッキーがくつろいでいる絵を見せるんです。そして「トットちゃんの家にあるもので、みなさんの家にあるものは何ですか？」と訊きます。そうすると、「テーブルや椅子！」「楽器がある」「ペットも飼っている」と声があがります。トットちゃんの家の中には、自分の家との共通点がいっぱいあるわけですね。この共通点の多さが、物語への親しみにつながります。そして、トットちゃんと家族が団らんしている、何気ない日常が描かれたこの絵に、「平和」を感じ取ってほしいんです。たぶん、多くの生徒さんは、この絵をパッと見ただけで平和を感じ取れない。しかし、物語を読み進めていくと、この団らん＝平和が失われていくわけです。いまの私たちの日常はとても貴重な瞬間の連続なのではないか、そんな思いをこめて描きました。

トットちゃん、そして黒柳さんはとっても稀有な存在で、お年寄りから子どもまで誰からも愛されている人です。そんな黒柳さんの魅力を、この絵本のなかにふんだんにこめて描きました。

トットちゃんが世界中で読まれ続けるということ

——最後に、松本さんがトットちゃんを通して平和を考える意義について、お聞かせください。

私は戦後生まれですが、戦争や平和について考えるきっかけは幸運にも子どもの頃から多くあったと思います。まず私の両親がつくったちひろ美術館は、「世界中の子どもに平和としあわせを」というちひろの願いを理念に掲げています。そして館長はユニ



【左】黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』（講談社文庫、2015年）。

【右】黒柳徹子（原案）、柏葉幸子（文）、松本春野（絵）『トットちゃんの15つぶのだいず』（講談社、2023年）。

セフ親善大使でもある黒柳さんです。ちひろ美術館には、世界中の絵本の原画コレクションがあります。

その中には、戦争の真ただ中で描かれた作品や、戦火に焼かれないために遠い国から日本にやってきた作品もありました。

日本とは体制も価値観も異なる国や文化で描かれた作品の中にも、「子どもを大切に思う心」が込められていると、気づかせてもらえた子ども時代でした。繰り返しになりますが、トットちゃんは今も世界中で読み継がれています。私たちの生きるこの世界には様々な価値観があり、そのなかで対立もあります。しかし、どんなに対立しあっても、子どもを思う大人たちには「トットちゃんのように、子どもがのびのび育ってほしい」という同じ願いがあるのではないのでしょうか。だから、トットちゃんは世界中で読み続けられているのでしょう。トットちゃんを愛している人が世界中にいるという事実、私は勇気づけられます。トットちゃんのように、みんなと手を繋ぐことは夢ではないのでは、そんな思いにさせてくれるのが、トットちゃんという存在なのではないのでしょうか。

話者プロフィール

まつもと はる の
松本 春野さん

絵本作家・画家

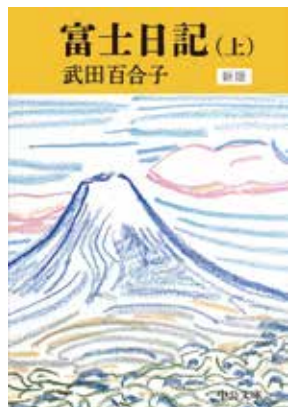
1984年、東京都生まれ。多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。主な著書に『バスが来ましたよ』（文／由美村嬉々、アリス館、2022年）、『トットちゃんの15つぶのだいず』、『Life ライフ』（文／くすのきしげのり、瑞雲舎、2015年）などがあり、著書は20冊を超える。絵本制作のほか、執筆や講演活動も行う。



リーブラ図書資料室からのお知らせ

◆リーブラ「港区ゆかりの人物」のお知らせ◆

リーブラ図書資料室では、年に数回、港区ゆかりの人物を紹介する特別展示を行っています。今回は、随筆家の武田百合子の特集しています。展示は2026年3月まで、リーブラ入口すぐの「港区ゆかりの人物」コーナーで開催中です。関連資料もあわせて公開しており、閲覧や貸出が可能です。ぜひお立ち寄りください。



武田百合子(著)『新版 富士日記(上)』
(中央公論新社、2019年)

戦後日本を代表する随筆家・武田百合子は、赤坂に暮らしていたこともある港区ゆかりの作家です。

夫で小説家の武田泰淳(代表作『富士』)と娘・花と過ごした富士山麓の山荘での日々を綴った『富士日記』は、日記文学の金字塔として、没後30年を過ぎた今も多くの人に愛されています。

ぜひ関連資料とともに、彼女の生き様と言葉の魅力に触れてみてください。



リーブラ・展示スペースの様子
(写真は港区ゆかりの作家・武田百合子の展示)

◆リーブラ 図書資料室「特別コラボ展示企画」のご案内◆

リーブラ図書資料室では、年に数回、港区内の他の図書館と連携した「特別コラボ展示企画」を実施しています。期間中は、協力館からお借りした所蔵資料をガラスケースにて展示します。資料を手にとって閲覧することはできませんが、関連するリーブラ所蔵の図書もあわせて展示し、貸出できるようにしていますので、ぜひご利用ください。



BICライブラリ×リーブラ図書資料室 特別コラボ展示企画

「ハンドルをつかむ女性」

2025年12月8日(月)～2026年3月15日(日)

展示場所: 港区立男女平等参画センター リーブラ 図書資料室

助手席から運転席へ――

100年前から続く女性たちの挑戦。

1917年9月、日本で初めて自動車運転免許試験に合格した女性が誕生しました。日本初の女性運転手といわれる「渡辺はま」は、見習い運転手として働きながら運転免許試験に臨み、見事合格を果たしました。当時、自動車はごく一部の富裕層の乗り物であり、運転は男性のものとなされていたなかで、女性が自らハンドルを握ることは、極めて画期的な出来事でした。今回の展示では、BICライブラリの「くるまコレクション」より、女性ドライバーたちが社会を切り開いてきたあゆみに注目し、女性と自動車にまつわる貴重な資料を展示します。



港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦

Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254

▶<https://www.minatolibra.jp/>



@libraminato

講座情報等をメールマガジン「クラブL」で配信しています(月3回)。

登録はこちらから →

アクセス

- JR「田町駅」東口(芝浦口) 徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線・三田線「三田駅」A6出口 徒歩6分
- ちいばす ◆芝ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」徒歩0分
◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」徒歩4分
- 都営バス(田92・99)「田町駅東口」徒歩6分



港区男女平等参画情報誌「OASIS オアシス」88号 2026年1月発行
発行: 港区立男女平等参画センター 指定管理者 株式会社明日葉

